

2024年11月24日 降誕前第5主日礼拝メッセージ

「小さい人はどこにいるか」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 25章 31-46 節

11月も早くも最終週となりました。夕方陽が沈み暗くなるのが早くなりましたし、朝も陽が昇るのが遅くなりました。朝晩だけではなく日中も、すっかり気温が下がり、あれだけ長く厳しかった残暑が明けて、急に冬がやってきたような、秋がどこかに行ってしまったような、変な季節感覚です。そうは言っても、来週はもう12月。クリスマスを待ち望む「アドベント(待降節)」が始まります。日本の暦では、お正月の元日に「新年明けましておめでとうございます」と言って、年が改まり、新しい一年が始まりますが、「教会暦」という教会のカレンダーでは、一年はクリスマスの4週前の日曜日、アドベントから始まります。そのために今日は、古い年の一番最後の日曜日、いわば年末の日曜日になります。

教会暦では11月を「死者の月」と見なして、召天者記念礼拝を行ったり、墓前礼拝を行ったりしますが、それも闇が深まるこの秋の季節を、人生の中で最も暗いと考えられる「死」というものに思いを馳せる時とする、という理由に基づいているからかと思います。そして12月に入ると、神の子が一人の赤ちゃんとして、新しい命としてお生まれになるクリスマスを通して、今の時代を生かされている私たちもまた新しく生かされて行くことを覚えながら、新しい年を迎えていくのだと、意味付けられているのだと思います。

さて、そのような「死者の月」の最終週であり、「年末」である今日の聖書のお話は、いわゆる「最後の審判」について述べられている話でした。世界の「終末」、最後の日に、神様である「人の子」がやってきて「審判(裁判)」を行い、全ての人を右と左に、羊と山羊に分ける、すなわち天国行きか、地獄行きかに分けるというお話です。西洋の絵画では、バチカンのシスティーナ礼拝堂の壁に描かれているミケランジェロの「最後の審判」という巨大な絵が有名かもしれませんが。しかし、そのような考えは、何もキリスト教にだけあるわけではなく、東洋でも閻魔大王^{えんま}によって人の生前の悪事が裁かれるという考え方があります。ですから、世界中で人類は昔から似たような考え方をして来ていたのではないかと思います。

ですから、このお話も約 2000 年前にこの地上を実際に生きて歩まれたイエス様が、そのまま語られたお話かという、どうもそうではなさそうです。例えば、31 節から 33 節の主語は「人の子」ですが、34 節以降は主語が「王」に変わっています。このことから、イエス様の死と復活から数十年後かに、この『マタイによる福音書』を記した人たちが、似たような二つの言い伝えを並べて一つのお話として編集して執筆したと考えられています。また判決を言い渡された人たちの問いに対して、王様が「あなたたちは〇〇したからだ」「〇〇しなかったからだ」と返事をしているという構成も、一言一句、実際にイエス様の口から語られたお話と言うよりも、数えきれない程の多くの人々の間で、口伝えて伝承されて来た「物語り・民話」の典型的な型式です。

歴史のイエス様と出会い、その言葉を聞き、その振る舞いを見た人々は、イエス様の語られたお話が心に残ったのでしょう。文字の読み書きができる人は全人口の数%しかおらず、羊皮紙やパピルス、インクなどの筆記具も高級品でしたので、ほとんどの人々はお話を口伝えて聞いて記憶していました。現代の私たちも、いわゆる「昔話」を本に書かれた文字で読んだのではなく、耳で聞いて覚えているように、2000 年前のパレスチナの人々もそうだったわけです。日本の「昔話」にも、大抵「よい人」が出てくると、もう一方には「悪い人」が出てくるように、そのような対照的・対比的な登場人物による物語の構成は、人々が面白おかしく物語を覚えて、更にまた他の人たちへ伝えていくためには、とても便利でした。そのためにイエス様の語られたお話にも、自然発生的にそのような変化が生じてきたのだと考えられます。

さて、今回の「最後の審判」のお話は、25 章の末に配置されていて、続く 26 章からは、いよいよイエス様が十字架へと架けられて行く「受難物語」が始まります。そのためにイエス様の宣教活動の最後、まとめとして 25 章があるとも言えるわけですが、24 章の終わりから、イエス様が弟子たちに語られたのは、「忠実な僕しもべと悪い僕しもべ」(24:45-51)、「賢い乙女と愚かな乙女」(25:1-13)、「タラントを増やした良い僕しもべと隠していた悪い僕しもべ」(25:14-30)という数々のたとえ話でした。それぞれに主人の期待通りの良いことをした人と、逆にそれらをしなかった悪い人とが、対照的に語られていますが、ここで共通していることは、期待されて

いることの何かしらを「やるか、やらないか」の以前に、そもそも「気付いているか、気付いていないか」、「感性を持っているか、持っていないか」ということなのではないかと思います。

「最後の審判」の場面で、集められた人々を右と左に分け、羊と山羊に分ける時に、王様は人々に、「私が飢えていたときに食べさせ、喉が渴いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれた」かどうかを確認して、右と左に判別しています。しかし、判別された当の本人たちには、それらの自覚がなく、むしろ「いつ私たちは、あなたが飢えたり、渴いたり、よその人であったり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お仕えしたでしょうか」また「お仕えしなかったでしょうか」と尋ねています。「大切なお客様である王様がいらっしゃることが分かっていたら、もっとちゃんと歓迎して、接待いたしましたのに」とでも言いたげです。しかし、王様は言います。「よく言うておく。この最も小さな者の一人にした／しなかったのは、すなわち、私にした／しなかったのである」……。つまり、言い換えれば、「あなたの目の前、隣にいるその小さな人の存在に気付いていますか」、「その人はあなたの助けを必要としていますよ」（ルカ 11:29-37「善きサマリア人」のたとえ）ということなのではないでしょうか。

イエス様は弟子たちを、村々に派遣する際に、鋭い牙や爪を持つ狼とは対照的に、力の弱い羊として、「ヘビのように感性鋭く、鳩のように率直に行動するように」と言われました（マタイ 10:16）。目に見える力に頼ることの出来ない弱者だからこそ、感性の鋭さが備わっているのもあって、その感性を大切にしてください、とされているのだと思います。また 25 章の前の 24 章で、繰り返し「目を覚ましていなさい」と言われているのも、あなたのすぐ近く、目の前、隣に、「神は来ている」「小さい人はいる」ということと同じことなのだろうと思います。

「小さい人はどこにいるか」……。小さい人、あなたの助けを必要としている神は、あなたの目の前、隣におられ、いつでもどこにでも、今ここにもおられる……。ただ、その事実気付けるかどうか、気付く感性を持てているかどうか、ということなのだろうと思います。心に感じるものがあり、引っかかるものが無ければ、目に入っても見ても見えず、耳に入っても聞いても聴こえず、気付くことができません。では、

どのようにすれば、小さい人がすぐ隣にいることに気付けるのでしょうか。その感性を磨くことが出来るのでしょうか。それが次の課題です。

このことについて、明確な答えを即答することはできませんが、「愛」や「幸せ」というものが、お店では販売されていなかったり、通信販売でも手に入らなかったりするのと同じように、一人一人が自分の生涯の中で、経験して、感じ取り、また見出し、そして身につけていくものなのではないかと思います。そのためのヒントとなるのは、「小さい人」は私たちの目の前や隣にいただけではなく、私たち自身もまたいつでも「小さい人」になり得る存在に他ならないということではないかと思います。日本でも昔から「諸行無常」「盛者必衰」と言われていますが、今は自分で立っている人でも、やがて自分で立てなくなる時が来ます。今は目の前の人に対して、「何かをしてあげる」と言って、「上から目線」で「してあげる」ことができていたとしても、やがてできなくなる時がきます。そして自分が「して頂く」側になった時、それまでの自分が「上から目線」であったことに気付くのではないのでしょうか。

先月の衆議院選挙で、議席を大きく伸ばした国民民主党のキャッチフレーズは「手取りを増やす」で、そのために今は所得税の減税が検討されています。その一方では増え続ける社会保障費を削減するために、高齢者の尊厳死を法制化するとも言っていました。生きる価値のある命と、生きる価値のない命を、誰かが判別する社会になるということです。もしもそうなった時には、「小さい人たち」は、一体どうなっていくのでしょうか。物価が上がり続け、生活が苦しくなり続けて行くと、とにかく目に見える形で、一刻も早く現状を変えて欲しいと多くの人々が願うようになり、容易にファシズムに陥ってしまいかねません。この苦しい状況を誰かのせい、何かのせいにして、その原因を取り除けば夢が叶う、かのように集団心理を扇動する言動もあります。しかし、歴史を見れば明らかなように、一部の人を切り捨てる先に平和はありません。むしろ小さい人を大切にすることからしか、平和は始まらない、ということ、イエス様はその身をもって、その言葉と振る舞いで、私たちに示してくださっています。

「小さい人はどこにいるか」……。その「小さい人」と共におられる神様によって、力を与えられ、また導かれながら、私たちは目の前にいる小さい人を大切にする歩みへと、歩み出して行きます。